Title	中国におけるプロテスタント神学教育の現状
Author(s)	松谷, 好明
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4 : 12-19
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2680
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

報　告

中国におけるプロテスタント神学教育の現状

松谷　好明

筆者は１月３日㈪から12日㈬までの10日間、四度目の訪中をし、上海、南京、重慶、成都にある三つの神学校と一つの聖書学校における神学教育の現状を調査した。（上海、南京には日中教会史を専攻している筆者の四男で日本基督教団の牧師、曄介が通訳を兼ねて同行した。）以下はその報告である。

１.総論

⑴今回筆者の各校訪問のために連絡の労を取ってくださったのは、中国プロテスタント教会（政府に登録している公認教会）全体を統括している中国キリスト教協会（CCC）の副総幹事（国際交流・教育部門の責任者）で、旧知の包佳源（Bao Jiayuan）牧師である。１月４日㈫筆者は、各校訪問の前に、全国両会（「中国基督教三自愛国運動委員会、Three-Self-Patriotic-Movement：TSPM」と「中国キリスト教協会、China Christian Council：CCC」の両者を合わせて中国ではこう略称される）本部（上海市九江路219号）の包牧師の執務室で、中国教会全体の神学教育の現状と課題について同牧師から全般的なガイダンスをしていただいた。同氏が最も強調していたのは、①全土における牧師の数の圧倒的不足と、②牧師の養成に当たる神学教師の質、量、両面におけるレベル・アップの必要、③金陵協和神学校が出すB.Th.およびM.Th.の学位はCCCが認定しているだけで政府が認定しているものではないため、同校の卒業生で優秀な人を海外の神学校、大学に留学させようとしても上級の課程への入学を認めてもらうことが難しい。何とか対策を立てねばならない、といったことだった。

左：包佳源牧師、右：筆者

昼食時には、日本NCCの招きで去る12月に来日した中国教会代表団の一員で、筆者が東京でお会いしていた両会本部の社会関係部門の若き主任者、顧夢飛（Gu Mengfei）氏も加わり、楽しく有益だった。

⑵中国の政府登録にされた教会の信徒数は、現在おおよそ約２千万人である（一般に「家の教会」とか「地下教会」と呼ばれる未登録教会の信徒数については２,３千万人から数千万人と諸説があるが、本報告の教会、神学校、聖書学校はすべて公認教会のものである）。正規の神学教育を受け任職された牧師は恐らく全国でまだ1000人に満たないから、牧師を補助する伝道師、信徒伝道者を加えても、中国教会における神学教育拡充の必要は緊急かつ大である。ちなみに、全国両会発行の2011年「信徒手帳」に掲載されている〈全国主要城市教堂地址及礼拝時間〉に掲載されている教会を数えてみると504教会であるが、一つの大きな教会の場合幾人もの牧師がおり、また、主要な都市以外の小さな都市にも教会があり、更に神学校、聖書学校の教師、両会の職員として働いている牧師たちがいることも念頭におかなければならない。

⑶中国のプロテスタント神学教育は三つのレベルで行なわれている。第一は全国から学生を募集する神学校で、これは現在までのところ南京にある金陵協和神学院（通称で南京神学校とか、南京ユニオン神学校と呼ばれる）ただ１校であ

る。第二は数個の省、特別市などから学生を募集する地方神学校（神学院）で、これは現在11校ある。第三は神学校（神学院）より低いレベルの聖書学校（聖経学院、キリスト教養成班、専門学校などの名で呼ばれる）で、現在10校（うち、貴州省および重慶市にある２校は、政府からまだ学校として認められていない）ある。第一、第二、第三、合わせて22校である。

⑷筆者はこれまで2007年９月に東北神学院（瀋陽）と吉林聖書学校（瀋陽）、2008年８月に金陵協和神学院（南京）、華東神学院（上海）の４校を個人的に訪問しているが、今回は金陵協和神学院（南京郊外の新キャンパス）と華東神学院を再訪したほか、新たに四川神学院（成都）と重慶聖書学校の２校を訪問した。４校の教室（中国のほとんどの神学校、聖書学校では教室が自習室を兼ねているので、教室の各自の机の上には教科書、辞書類が並んでいる）、寮に、暖房は一切ない。気温２,３度の中で頑張っている教師、学生たちの姿を思い浮かべながら、この報告を記す。

２.金陵協和神学院―唯一の全国的規模の神学校

⑴2005年１月に起工式が行われ、2007年に完成した新キャンパスは南京市中心部の旧キャンパスから神学院のバスで４,50分の郊外（つくば学園都市のような大学や研究機関の多い新しい地区）にある。昨年までに移転作業はすべて終わり、旧キャンパスの建物（美しい風格のある建物）はリサーチ・センターとして継続使用されている。中央政府の財政支援を受けて建設された新キャンパスは敷地が計３万８千坪で、校舎（約1400坪）、学生寮、図書館（蔵書数は６万冊）、チャペル、事務棟のほか、約３千坪のスポーツ・グラウンドが見事に配置されている。ただし、500人収容可能なチャペルは資金不足で建築工事が中断したままであった。

金陵協和神学院全景

⑵神学院の体制は昨年３月～５月に一新された。新理事長、新理事が選出されたほか、新院長にCCC会長、神学院理事長でもある高峰（Gao Feng）牧師、新副院長（教務、海外関係担当）に、陳逸魯（Chen Yilu）牧師（CCC副総幹事、全国両会神学校教育委員会ディレクター、広東神学院院長を兼任）を選出、もう一人の副院長に（リサーチ部門、図書館担当）に王艾明（Wang Aiming）牧師を再任した（主要人事で唯一の再任のように筆者には思われる）。

⑶学生のコースは基本的には二つで、４年制の神学士（B.Th.）課程（学部）と３年制の修士（M.Th.）課程（大学院）である。このほか、牧師の継続教育のための特別なプログラムが随時設けられる。学部の場合、受験資格は①高卒以上の学歴を持ち、（学部３年への編入希望者の場合は、聖書学校卒）、30才以下の熱心な信者　②各地の教会、CCCからの推薦。入学者は中国の文部省の規程に従った基礎的な文化系の科目と語学（カリキュラムの約30％）、および聖書、神学、教会史、実践神学などのキリスト教関連科目（カリキュラムの約70％）を４年にわたって取り、卒業論文を提出して卒業する。多くの人は出身地の教会に赴任し、少数の人が大学院に進む。

大学院のコースには本神学校卒業生のほか、

他の神学校を卒業した人の中で特に優秀な人々が少数送られてくる。院生は組織神学、キリスト教思想史、教会史、中国キリスト教史、旧約学、新約学、実践神学などの科目を２年間にわたって取り、３年目は主として論文執筆に当たる。大学院終了後、多くの人は各地の神学校の教師となるが、一部は出身地の教会の牧師となる。

⑷学生数は学部が毎年160 ～ 170人、大学院が30 ～ 35人、計200 ～ 210名（近い将来、これを500名にしたいというのが学校当局のビジョンである）であり、全員寮に入って学んでいる。寮は原則的に２人部屋で、他の神学校、聖書学校の寮（４ ～10名の部屋）と比べると恵まれている。授業料、寮費、食費などを含め、学生が負担する費用は5000元（現時点の日本円で約７万円）で、多くの学生は出身教会や家族、地方のCCCからの援助や学校からの奨学金などでまかなっているという。

⑸全国の神学校、聖書学校の中ではただ一つ、本神学院ではヘブライ語、ギリシャ語のクラスが設けられている（選択科目）ほか、英語教育が重視され、アメリカ人宣教師による実践的な英語と神学的英語のクラスが設けられているのが印象的だった。前週ですべての講義が終了して、学生たちは２週間後の試験に備えていたため、残念ながら授業参観はできなかったが、キャンパス内、特に食堂における学生たちは実に生き生きとしていた。ただし、食堂のテレビからは絶えず通俗番組と商品のコマーシャルが流れていたから、資本主義、消費文化、教会内外の世俗主義の誘惑との神学生たちの精神的な戦いは中国でも容易ではないことを痛感した。

⑹現在約30名いる専任教師陣は、全体として若い。外部の教育機関から来る非常勤講師も10名前後いる。専任教師の多くは当神学校の卒業生で、中には大学を出ている人々もいるが（神学の勉強で国内では博士号を取得できない）、海外で神学を学び博士号を取得している人は、副院長の王艾明（Wang Aiming）教授、ただ一人である。７人の教授のうち何と５名が博士号取得のため現在ヨーロッパに留学中とのことだった。本校で行なわれている中国最高のプロテスタント神学教育も、中国の一般の大学教育のレベルと比べるならば、学生、教師共に解決すべき課題が多いことが見て取られる。1980年代以降、特にこの10年間に出版されている神学書、注解書の翻訳とキリスト教関連の研究所の執筆の多くは、神学校の教師によってよりも、大学や政府の研究機関で働いている「キリスト者と非キリスト者」（従来は総じて「文化キリスト者」と呼ばれることが普通だったが、現在では「知識人キリスト者」と呼ばれることが多い）の研究者によってなされていることも中国における顕著な現象である。

左：王艾明教授、中央：筆者、右：夫人 王芃先生

３.華東神学院（上海）

⑴地方神学校の中で最も有力な神学校の一つがこの神学校であろう。1985年に創立された本校は2000年に上海郊外（ここも学園都市として開発された地区）の広い敷地（約5600坪）に建てられた新校舎（建坪約2700坪）に移り、経済的に

もゆとりのある運営がなされているように思われる。謝炳国院長(兼任)、徐玉蘭副院長のもと、専任教師18名、外部からの非常勤講師（哲学、文学、歴史などの科目を上海の諸大学の知識人キリスト者が教える）で、教育がなされている。常勤の外国人教授はおらず、時々、上海と全国の両会を通して外国人の客員教授が来て、６時間を限度に講義をすることがある。図書館の蔵書数は約８万冊である。

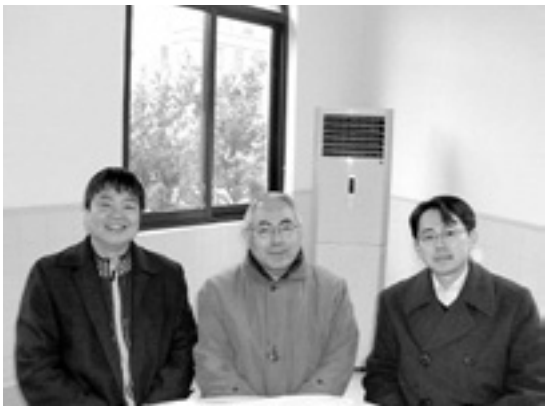
⑵四つの省（山東省、浙江省、江西省、福建省）と上海から学生を募集するが、浙江省からの学生が最も多く、豊かな上海からは最も少ないという。中国では都会の若者たちはキリスト者といえども、高校を卒業して神学校に行くよりは、厳しい受験戦争に勝ち抜いて大学に入学し、経済的に恵まれた職業に就きたいと考える傾向がある。本校は４年制の神学課程に115名、２年間の教会音楽課程に20名、計135名の学生が学んでいる。学費、寮費は無料で、食費のみ月300元（現在の日本円で約4200円）払うシステムとなっている。こうしたシステムを採れるのも、経済力のある上海はじめ４省の諸教会が毎年１回行う「神学校日献金」(その日の礼拝献金をすべて神学校にささげる)のお陰である。

本校の受験資格も①高校卒業、②教会および地方の両会の推薦で、受験者は５科目（国語、歴史、政治、英語、キリスト教常識）の試験を受け、約90％の人が合格する。大卒で受験する人も２,３割いるが、全員同じ試験を受けるとのこと。

⑶卒業生のほとんどは出身地方の教会に牧師として赴任し、ごく少数の者が南京の金陵協和神学院の大学院に送られ、終了後、神学教師となる人が多い。筆者を迎えて案内してくださった教務主任の王先生（45才）は本校の卒業生、若い神学教師（教会史、組織神学担当)、蘇先生（30才）は南京神学院の卒業生、その妻の陳先生（キリスト教思想史担当）は、本校卒業後、南京神学院に送られ、修士課程を終えて本校に教師として戻った人だった。

左：陳先生、中央：筆者、右：蘇先生

⑷本神学校の男性教師の定年は60才、女性教師は55才とのこと。筆者が「それでは女性差別だという批判が出ないのか」と尋ねたのに対し、王先生は笑いながら「男性に比べて女性は仕事と家庭の二つの重い責任を負っているので、少し早く楽にしてあげた方がよいと思う」と私見を述べた。男女間の定年の差は、激変しつつある中国の教会と社会に残っている伝統的な社会制度と見てよさそうに思われる。



左:王(教務主任の先生)、中央:筆者、右:松谷曄介

4.四川神学院（成都）

⑴この学校は中国の西南地方、すなわち、雲南省、貴州省、四川省の３省と重慶市の牧師養成機関として四川省の省都、成都に1983年に創立された。成都は他の都市と比べて空気と川の水が比較的きれいで、落ち着いた街である。かつてアメリカのメソジスト教会が所有していた土地、建物の半分ほどが政府から両会に返還され、教会堂が恩光堂（教会）として使用され、それに隣接している７階建ての石の堅牢な建物（建坪約900坪）が、四川神学院の校舎、教師室、事務室、学生寮として使用されている。現在は１学年30名の４年制の課程のみを設けており、学生は約120名、うち少数民族の学生が約30％である。専任の教師は李棟（Li Dong）院長、袁世国（Yuan Shiguo）副院長はじめ10名（うち南京神学院卒のいわゆる老教授は２人、シンガポールや香港で修士号を取って帰ってきた教師たちが４名）、外部からの非常勤の教師は５名ほどである。

前院長の毛仰三教授のクラス

⑵筆者は袁副院長の案内で授業中の三つのクラスに入り短い挨拶をし、更に四年生の第一コリント４章のクラスは１時間傍聴させてもらったが、どのクラスの教師、学生たちもクリスチャンらしく、表情は明るく、態度は非常に友好的

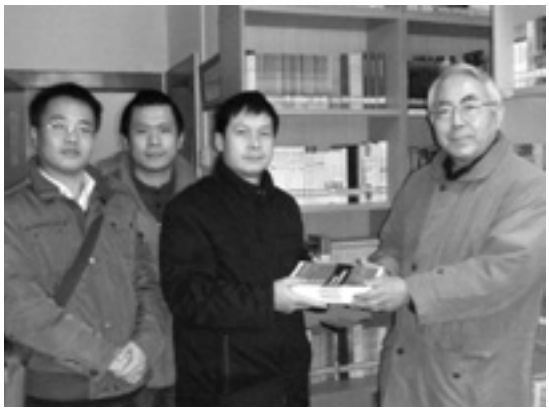
教室内の学生たち

で、心打たれるものがあった。学生たちは授業料、寮費、食費など総額で年2500元（現在の日本円で約３万５千円）を各自納めなければならないが、約半数の学生は経済的に困難で、さまざまな形での支援を受けているという。遠くの地から来ている学生たちの中には休暇中に帰省する交通費がなくて寮に留まらざるを得ない人もいるようである。学生たちの経済的援助をどのようにするかで始終頭を痛めている、と袁先生は言っておられた。なお、図書室の蔵書は1.1万冊。

⑶毎年約30名の卒業生のほとんどは出身地の教会に牧師として赴任するが、年に１人か２人、南京神学院に送られ、更に学ぶ者があるとのことだった。卒業生が赴任する中国西南地方、特に奥地、の教会は全体として貧しく、自ら農作業などをして働きながら伝道牧会を続けている牧師も少なくないという。

5.重慶聖書（聖経）学校

⑴1938（昭13）年から1943（昭18）年の５年半にわたる日本軍の爆撃で死傷者約２万５千人を出したことで知られる重慶は、至る所が坂だらけで、スモッグですべてがかすんで見える大都会（人口３千万人）である。聖書学校は、街中心



重慶CCC総幹事の廖牧師に聖学院大学総合研究所から出しているTheology of Japanのシリーズを贈呈。左端は通訳をしてくださった韓先生

部から車で30分程坂道を上っていった「山中」（丘の上と言うべきか）にある教会（救主堂）に付属した４階建ての古いビルである。2008年に開校したばかりで、まだ政府から学校として認可されておらず、現在は第１期生30人（男性は６人のみ）が一つのクラスで学んでいる。彼らが今年卒業すると、今秋第二期生が入学してくる予定である。専任の教師３名はいずれも若く、30才前後。図書館の蔵書は見たところ2,3千冊ではないかと思う。

⑵聖書学校の目的は将来牧師として任職される人々の教育ではなく、伝道師や教会音楽、教会事務等の面で奉仕する人々の養成である。３年間の

聖書学校の学生たち

課程で、神学校（神学院）同様、一般教養科目と聖書および神学の基礎と英語、音楽などを学ぶ。筆者は、外部講師による授業の後15分程挨拶と質疑応答のときを持った。学生たちは全体として素朴で恥ずかしがり屋だったが、中には学んだ日本語の挨拶をして笑いを誘い、クラスの雰囲気を盛り上げる元気な女子学生もいた。

⑶教師たちは使命感と熱意に溢れていたが、与えられている課題の大きさと所与の諸条件（限られた人材、校舎、設備、学生の数と質、待遇等々）の間で苦闘しているようにも感じられた。

６.まとめ

⑴キリスト者人口１％の現実の壁

今回訪問した４校には熱心に学ぶ学生たちがそれぞれ30～200人いて、このような神学校、聖書学校が全土で20余に上り、毎年新たに数百人の伝道者が増えていくと聞けば、中国の教会の未来は明るいと日本のキリスト者の多くは考えるかもしれない。また、中国の諸都市の教会はどこも数百人から千人、二千人の礼拝を日曜日ごとに何度も行っていて、一見すると日本の教会とはその規模が到底比較にならないように思われる。筆者が仕えている教会は礼拝出席者が約20人だと言うと、中国の神学教師の一人は吹き出してしまい、「本当にあなたはたった20人の人に毎週説教しているのか?!」と、信じられない様子だった。しかし、中国の各個教会が大きいのには特別な背景がある。実は、中国の人口は日本の10倍以上であるが、歴史的、政治的な事情から現在では教派は認められておらず、教会組織はただ一つであり、また政府から返還されている教会の不動産は限定的だから、教会数はごく限られているのである。先に触れた「信徒手帳」によれば、人口1400万人の上海には24教会、3240万人の重慶に17教会、1100万人の成都にはわずかに３教会、600万人の南京にも３教会しかない（もっと南京の場合、実際

には下関や鼓楼の近くにも教会はあるので、これらの数字はあくまで主要な教会のみであり、また一つの教会が数個の集会所を持っていることもあるが)、といった具合である。各個教会の礼拝者数が大きいのはこうした事態の反映である。地方CCCの責任者の一人は、自分たちの地域のキリスト者人口は多分１％位ではないかと話していた。キリスト者人口が１％と考えれば、中国の神学校の数やレベル、学生数、教師数、図書館・図書室の蔵書数などが必ずしも十分ではないこと、等々、について我々が抱くいろいろの疑問が、解けてくるように思う。

⑵歴史的条件

中国における神学教育が比較的自由に行われるようになったのは1980年代以降であるから、その歴史はわずかに30年と言ってよい。19世紀、西欧列強による植民地支配と19世紀末から20世紀中葉にかけての日本の軍事的侵略と支配、内戦と中華人民共和国成立後の種々の政治運動、とりわけ1966年～ 77年のいわゆる文化大革命の中で、中国における伝道と教会建設はもとより、神学の研究と教育が自由闊達に進められる余地はほぼ皆無だった。周恩来→鄧小平主導による改革開放路線が定着して以降、教会と神学はようやく息を吹き返したのであるから、神学校、神学教育における学的水準の向上、図書館の充実、物質的諸条件の改善などの面で今後なさねばならない課題が中国教会に山積しているのはむしろ当然である。

⑶三自（自治、自養、自伝）の原則の新たな展開に向けて

列強支配下の前近代的中国における福音伝道と教会の在り方に対する厳しい批判と反省から共和国成立後の中国において海外教会に依存しない三自の原則を中国教会が深く受け止めたことに、筆者は理解と敬意を覚える者の一人である。また⑵に述べた歴史的諸条件も、また神学教育の一環として必須とされている「政治教育」(筆者はそのテキストを入手して概観したが、それは三自の立場から見た「中国近現代教会史」と言うべきものである）も、必ずしも否定的にのみ捉えるべきではないと考える。そうした者の一人として中国教会と神学教育に対する筆者の祈りと期待は､次のようなものである。

①三自の原則は、近代日本の教会と神学が、曲りなりにではあるが、いち速く実践しようと努めてきたものである。東アジアの国の教会として中国教会は、日本のキリスト者人口は１％にすぎない、日本の教会と神学から学ぶものはない、などと考えず､「来たりて見よ」である。欧米の教会のような規模の経済的援助を日本の教会はできないだろうが、ペトロと共に「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう」と言うことはできる。隣人として神学研究・教育において協力できる余地が大きいと考えるからである。そのために、何よりも日中間の神学教師の交流の拡大が望まれる。

②中国教会の機構は、外部の者には少々分かりにくい。特に、両会と神学校との関係はそう思われる。例えば、神学校の院長や教師の名刺の肩書にはいくつもの役職があり、責任、権限の面でのその相互関係がよく分からない。また、神学校の人事や教育内容の決定は両会、政府との間でどのようになされるのか。これら一連のことは、中国教会における三自がより教会的になる必要があることを示唆しているように筆者には思われる。

③日本の教会と世界の教会が中国の教会とキリスト者から学びうる最大のものは、もろもろの苦難と死の中から主なる神の恵みによって

救い出され、命を与えられた証しであろう。しかし、そうした真実の証しには、人間の失敗や挫折も含まれなければならない。そうして初めて「福音書」となる。そうした「福音書」が記されるためにはなおしばしの時が必要だろうが、特に神学校、聖書学校における神学教育の歴史が中国人神学者によって将来著わされて、世界教会の「福音書」となることを期待している。それまでのしばらくの間は、アメリカ人の神学者（オランダ改革派教会、RCA）、Marvin D. Hoff編　の“Chinese Theological Education, 1979-2006”（Eerdmans, 2009）で満足しなければならないように思う。

１月６日（木）、筆者（右）と息子（左）は、戦後のプロテスタント神学界の指導者で元、南京神学校の院長だった陳澤民先生（中央）を南京のお宅に訪問した。

⑷希望と期待

現在の中国教会とその神学教育に大きな課題が山積していることは繰り返し述べた通りであるが、訪問中にお会いした諸先生、学生たちの教会の主、イエス・キリストに対する愛と、海外の主にある兄弟姉妹に対する開かれた姿勢は、政治的、社会的安定がありさえすれば、中国教会がそれらの課題をよく担い、果たすであろうことを筆者に確信させた。筆者としては、多くの方々の協力を得て近い将来、そうした課題を担う中国の指導的神学者・神学教師を日本にお招きして相互の交流を深めることに努めたいと考えている。

※補遺

⑴中国の神学教師、牧師たちからよく聞いた現代の欧米の神学者、牧師たちの名前は、日本の我々にも馴染みのあるもので、主流派、福音派、両方のものがあった。例えば、ウィリアム・バークレー、バルト、ニーバー、ボンヘッファー、パネンベルク、ジョン・ストット、ビリー・グラハム、パッカー、ゴードン・フィー、ゴンザレス、マクグラス、リック・ウォレンなどである。

⑵中国の神学校の華人系神学校との交流は、年を追うごとに活発になっている。具体的には、台湾の福音派神学校（中華福音神学院、台湾浸信会神学院Taiwan Baptist Theological Seminary）、香港のルター派学校（信義宗神学院）、香港中文大学崇基学院、シンガポール三一神学院などである。

⑶中国の神学教育についてはネット上にもさまざまな情報がある。例えば、
華東神学院HP　http：//www.ectssh.com
金陵神学院HP　http：//www.njuts.cn/
CCC／TSPMのHP　http：//www.ccctspm.org/
愛徳基金（The Amity Foundation）HP　http：//www.amityfoundation.org/

（まつたに・よしあき　聖学院大学総合研究所特任教授、日本基督教団館林教会牧師）